
「ドラゴンクライシス！」

コアス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「ドーラ・ゴンクライシス！」

【著者名】

N4591Q

【作者名】 コアス

【あらすじ】

「ドーラ・ゴンクライシス！」のドリームノベルです！

EP1 「始まりのロストプレシャス」（前書き）

お久しぶりの人もはじめましての方もここにちはコアスです。
誰も書いていなかつたよつので書かせて頂きましたw

EP1 「始まりのロストプレシャス」

「山奥山頂付近」

「依頼主が指定したのはここだよな？なんでもこんな山奥なんかに？・・・」

俺は西園鷹也。高一だ。裏の顔は遺物《ロストプレシャス》専門の運び屋だ。

「こちらです」

「うむ確かに」

「あなたさまも大変で」「やりますでしょ」？

「いえ、俺がやりたくてやつていることですから」

「そうですか。報酬は振り込んでおきま・・・ウグー？・・・ドン！」

「なつ！？・・・」

依頼主が狙撃された。

「チイ！何者だあ！？」

護身用のツインガトリングガンをぶつ放す。

「ターゲット確認！この戦いに必然性はない・・・

「グハ！？・・・・・」

「撤退！撤退！」

敵は撤退したようだ。

「大丈夫ですか！？」

「ウウ・・・私のことはいい・・・カハッ！？・・・はやくそのロストプレシャスを・・・ファングの手に渡る前に・・・」

「なんだと！？」

聞いたことがある。ロストプレシャスを悪用しようとする悪徳企業のことか。

「あ・・・後報酬は私のポケットのクレカで・・・」

「！・・・・つてそういうわけにはいきませんね」

一瞬キヨピーン 思考となつた俺だが急いで病院へそして…
「君が『マイツ』のことをここまで運んできてくれたのかね？」

「ええそうですが…・・・」

「申し遅れました。私こういう者です」

名刺を受け取り俺は驚愕する。

「世界遺物保護協会、ソサエティだと…?・・・」

「ああ、いえいえ私達は君を捕まえたいたいなんてこと考えてないですよ。ただ、城樹が持ち出して君に預けたロストプレシャスのことについてお礼を言いたくてね」

ソサエティ所属研究員の戸倉さんの言葉にホッと安心する。

「ところで君は中身を見たのかね？」

「いえ、ファングの襲撃をうけたもので…・・・」

「なんなら是非見せて差し上げましょうかな？」

「ええ、是非！」

ついでにSかAクラスのロストプレシャスを下せ!。

「それ差しあげましょうか?」

あ、心の声が漏れていたようだ。

「君の遺物使い『ブレイカー』レベルはいくらなのかな?」

戸倉さんが聞いてくる。顔近いって!

「え、一応レベル6です」

「そうですか」フムフム・・・

そして第一特別研究室へと案内され…

「では、」開帳…」

「これは…・・・卵?・・・」

紫色と緑色、金色の三種類がアタツシュケースに収められている。

「Sクラスのロストプレシャスですよ」

「一体何の卵なんですか?」

「ドラゴンの卵なんですよ!」

「!/?ドラゴンだと…・・・!?

「ええ、ダークドラゴン、グリーンドラゴン、ゴールドドラゴンの

です！」

「凄い！……」

そこらのアロストプレシャスの比じやない。

「もしかして欲しいとでも言つのですか？」

「また俺の心の声が〔以下略〕

「なんなら一つ差し上げましょつかな？」

「え！？ 本當ですか！？」

「竜司君の例のこともありますしサンプルといつぱん……」

「誰なんですか？ソイツ」

「ああ、レッジドリガモンの契約者ですよ世にも珍しい」

「・・・・・」

戸倉さんの目は物凄く輝いていた。

続

EP1 「始まりのロストプレシャス」（後書き）

次回、どの卵を選ぶ？そして・・・

■ア?「出でこの選択」と(前書き)

お待たせ致しました!

（翌日）

「・・・・「一むどうじよつか？・・・」

俺は昨日三色種ドラゴンの卵を一時受け取ったまではいいのだが・・・
・悩んでいた。

「どうせなら全部育てたいのだが・・・」

戸倉さんが「一体だけでお願ひしますよ」とかちよいとふざけた
ことをぬかしたのでボコボコにしようと思つたが馬鹿らしくのでや
めといた。

「あー・・・マジかよー・・・」

結局決めていないためにまだケースから出してはいない。

「そうだ！ ルーレットで決めるか！」

えらくいい加減だがそれでもいいか・・・。

「さあ！・・・」

そして決めようとしたその時・・・

ドガガガツ！ ドガツ！ ガツ！ ドガシャーン！

「！？ くう・・・何者だあ！？」

「僕の名はオニキス、ブラックドラゴン也。そしてこれは・・・
彼、オニキスが付けてるバッジを見て俺は気付いた。

「！？ ファングの一員か！？」

「ほおう・・・、君みたいな坊やがファングの事を知つていいとは
これは驚いたねえ・・・」

「俺は一般人じゃねえさ。それで・・・俺になに用だ！？」

「分かつていいだろう。その三つの卵全部こっちによこしなー。」

「やはりか！ 貴様がファングと分かつたからには余計に渡すわけ
にはいかねえなあ！」

「フン、そういうと多少は思つたよ。残念だなあ・・・ならばここ
で死ね！」

ヒュイン！

「アーリー・?」

凄まじい猛攻撃をまとめて喰らってしまった。

「クソ！・・・これでもか！」

言い忘れていたが、俺はもう

言ふ忘れていたが、俺はもう一戸廻さんばかりでなく、ローリー・レシャス「想眼の鉛」を受け取っていた。効果は不明らしげだが……。

卷之三

九ノ月

カノカニの湯野川

「ジーッの思ひ描いたものでござる」

「嗰幾件嘢我唔知點樣用。」

ボゴオツ
!

「死ねえ！」

オ一キスは本気怒全開パワーを出してきた。

このままではマズイ・・・もう迷っている時間はない・・・。

「ハキハキハキハキ——！」

俺は猛ダツシユで卵に向かう。

「！さやるかあ！」

フウン！それに気付いたオーキスも進撃していく。

俺の未来を！

作手金を不二三木に持て、自を戻りかまひ身に角材力士を

卷之三

卷之三

二
•
•
•
•
•

アーリー・スティーブンソン

綺麗な紫の髪そして瞳、そして手にはドラゴンの証である龍紋が刻まれた美少女が誕生した。

「まさか・・・コイツもー?・・・」

「・・・エシゲージ！・・・一×2

「そんなの認めない！消えてくれ！」

ハ・お・お・お・お・お・お・お・お・お・お・

ナニシテノ!

うぐわあー！！？
。。。。たか僕は
。。。。「

「しまった！」

なんとかゴールドドラゴンの卵は

等に奪われてしまった。

一あはよ人間風情か!

卷之三

続

EP.2 「出雲との選択と」（後編）

次回、本当の戦いはここから幕を開ける！
P・S感想、評価どうぞ！

■ア?「櫻井ゆへ口論」（前書き）

ふと思つたこと。

△倉さんの存在感あります。戦闘員よりも強い研究員つて…。

EP? 「壊れゆく口算」

「翌日、ソサエティーロビーにて」

「・・・ そうですか・・・ またファンガの連中に・・・」

「ええ・・・ スイマセン・・・」

「で・・・ どうしたんですその頬の跡は?」

「話すと長くなりますが・・・」

「ああ、別に構わないですよ。竜司君達が来るまでにまだまだ時間
はありますから」

「はあ・・・」

（回想）

「・・・・・ イテテ・・・ あんにやろつ・・・ 僕のミスか・・・」
「 昨夜ファンガのブラックドラゴン、オニキスと名乗る奴の襲撃を受け、卵を一つ奴等に強奪されてしまった。土壇場でエンゲージしようとして竜の固有結界を解いてしまった結果だろう。

「・・・ あー胸クソ悪いー少し寝よう・・・」

「 そうしてベッドルームに入つた途端・・・」

「・・・・! ! ? ・・・」

「 z / / /」

「・・・・・ / / /」

なんと部屋に一人の美少女がいた。一人は寝てるし、もう一人はあさくつて着替えの途中だったようだ。ハツ! ? この状況はかなりマズイ! ?

「あ・・・ あの? . . . / / /」

「・・・ いつまで・・・ 人の着替え見てんのよー」

鉄拳が飛んでくる。

「ぎえー! ? . . .」

「ー」

俺の悲鳴で目が覚めてしまったようだ。

「・・・・・」

「え？・・・・・ング！？・・・・・」

「あーーー！」

俺に近付いてきていきなり唇を重ねてきた。
ちよ w

「・・・・人の妹になにしてんのよーーー！」

「のおおおおおおおおーーー！？落ち着けってそれは勝手にむこうが・・・
・つてアレ？さつきまでの痛みが・・・消えた！？・・・それに包
帯は・・・」

「なんだ・・・治癒魔法だつたのね・・・そ・・・その・・・包帯

私が巻いといてあげといたのよ・・・悪い？」

「い・・・いやそんなことは・・・」

彼女は赤面していた。

「・・・服早く着たら？」

「・・・はやく出でけえーーー！」

「のおおおおおおーーー！？」

（戻つて）

「・・・というわけです・・・」

「本当に長かつたですねえーーー・・・それより貴方なにか大事な事見
落としてませんか？」

「・・・あ！そういうば・・・」

急いで手の甲を見る。なんと両手に契約の紋章が。

「貴方は一体のダークドラゴンとエンゲージしてるんですよーーー！」

「そうか！」

「これは今までまたない例のない結果ですよーーー一つの卵から
双子が生まれ、人の契約者がいるなんてのは。これは学会で発表し
なければ・・・」

戸倉さんは物凄く目を輝かせていました。

「おつとスキンянが終わりましたよ。ブレイカーレベルが1上がっ
てます！」

「え！？・・・」

「これは推測なんですが、恐らくドリフツンとエングージしたからで
しょう」

「・・・・・それにしてもなあ・・・」

「フン！・・・」

彼女はそっぽを向くばかりだった。

続

EP? 「壊れゆく日常」（後書き）

名前は次回でー。〔※分〕

EP? 「鼓動」(前書き)

お待たせしました！

E.P.? 「鼓動」

「あー、来たみたいで、お前達が

-
!

卷二

「تئیت」

「ちゃん」

「日本書紀」

「ども！レベル7ブレイカー、西園鷹也です宜しく

「……………」

「ローズだよ！」

卷之二

「え！？」

「ああ、名前まだ付けてなかつたな。うむ・・・リミとリルカだ」

卷之三

ପ୍ରକାଶିତ

如の間に懐方枕でかじかみ

—

「しゃあね・・・リルカ、一緒にしようか?」

27

「ローズ」いつちもしよ

「うん分かつたよ。リュウジ」

「エンゲージ……」

すると突然・・・

「出遅れたあー・・・」

「ビアンカ！？どつから出てきたのよアンタは！？」

「新たなブレイカーがいると聞いちゃ黙つてられないのがこの僕ビ
アンカ・A 「アレッサンドラ」・ルーサ！ サあ、君調べさせてく
れ！」

「うわー！？』

この後酷い目に逢つたのはいつまでもない。

続

EP? 「鼓動」(後書き)

次回、大バトルの予感!?

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4591q/>

「ドラゴンクライシス！」

2011年2月18日10時30分発行